御堂関白記の程度副詞「極（メテ）」について

清水教子

序
一、御堂関白記の「極（メテ）」
二、小右記・権記の「極（メテ）」
三、中国側の文献における「極（メテ）」
四、今昔物語集の「極（メテ）」
五、結論

序

記録語の研究は、その文献に表記されている個々の漢字がそれぞれ担っている和訓、それを決めることから始めなければならない。が、それは、個々の漢字の用法を調べることと相まって決められるべきものである。このようにして、個々の漢字の和訓が決められると、今度は、語彙・語法などの研究へと進むことができる。

ところで、記録語の従来の研究は、位相語の立場から、ある語は記録語には見られるが、和文語には見られない、といったように、主としてその有無を重視して、その意味用法にまでは必ずしも触れられなかった、と思われる。そこで、記録語の一文献として藤原道長の御堂関白記を取上げ、そこに現れている「極端」を示す程度副詞「極（メテ）」について、その用法を調べてみたいと思う。

御堂関白記（以下、本文献と呼ぶことにする）を取上げた理由は、次の三点である。(1)自筆本14巻・古写本12巻が現存していること。(2)時代的に見て、その記載年月が平安中期末から平安後期初頭という、国語史上重要な時期にあること。(3)和化漢文の上で、記録語（＝公卿の日記）という一部類を占めていること。

又、副詞「極（メテ）」だけを取上げた理由は、次の二点である。(1)名詞・動詞などは、文献によって、その語彙に出入りが見られるのに対して、副詞はその語彙がかなり共通すること。(2)「極端」を示す程度副詞の中では、「極（メテ）」に、以下に述べる著しい傾向が見られること。

本文献には、「極端」を示す程度副詞として、「極（メテ）」の外に、「頗（ル）」「甚（タ）」（又は「太（タ）」「尤（モ）」が見られる。これらは築島裕博士によって、訓点特有語とされているものであるが、本文献にも用いられている。本稿では「極（メテ）」に焦点をあてているが、残りのものとの関係は無視できない。しかし、手順の最初として、「極（メテ）」の用法を明らかにすることにしたい。

方法は、先ず、本文献の「極（メテ）」の被修飾語に着目して整理する。その結果を、本文献と同時期の記録語の文献――小右記・権

記――のそれと比較してみる。次に、中国側の文献（漢籍・漢訳仏典）における結果と比較する。最後に、本文献とは表記形式を異にし、しかも読み方の比較的はっきりしている今昔物語集の結果と比較してみる。

一、御堂関白記の「極（メテ）」

本文献の「極（メテ）」の被修飾語に着目して整理してみると、次の二点が得られた。

(1) 被修飾語の意味は、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示している場合が大部分であること。つまり、被修飾語の意味に片寄りが見られること。

(2) 被修飾語は、基本的には情態的な意義を示す語が大部分であること。ただし、動作的な意義を示す語もわずかに見られること。

本稿末の〔資料一〕〔資料二〕（以下、資料は全て本稿末に一括して示すことにする）は、本文献の「極（メテ）」等の被修飾語について、一覧表にしたものである。表の見方について説明すると、ローマ数字Ⅰは、被修飾語の意味が、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示している場合である。ローマ数字Ⅱは、逆に、被修飾語の意味が、称賛すべき事柄・望ましい事柄を示している場合である。ローマ数字Ⅲは、前二者から外れる場合で、望ましくないとか、望ましいとかの判断には一応無関係の場合である。

ローマ字 a は、被修飾語が情態的な意義を示す場合、ローマ字 v は、それが動作的な意義を示す場合、ローマ字 n は、それが名詞的な意義を示す場合である。

なお、これらの記号は、以下に掲げる全ての例にわたって共通するものである。

又、被修飾語の読み方は便宜的なものであって、「極（メテ）」の用法を考えるために、一つの目安として用いたに過ぎない。

次に、「極（メテ）」の具体例を若干示すことにする。（注　傍線・波線は私に記したものである）

Ⅰ－a ①頼親停任事、是又極奇事、頼親身無罪、所申無便、（寛弘三 7/15 上一八六ペ）

（頼親の身には罪が無いのだから、頼親を停任する事は非常にけしからぬ事である、という意。）

②七十大臣所作極以不覚也、件人自本白物也、仍所致也、（長和五 正/30 下四四ペ）

（七十歳の大臣＝藤原頭光の作す所は非常にしくじりである。件の人はもとより愚か者だ。だから、しでかしたのだ、の意。）

Ⅰ－v ③又胸發動、極不堪、（寛仁二 5/8 下一六三ペ）

（又胸が痛くなった。非常にがまんできない、という意。）

Ⅱ－a ④被仰云、行幸日可聞参東宮給由者、啓事由、可参給者、宮御気色極宜、有悦気、（寛弘三 9/3 上一九一ペ）

（宮＝居貞親王の御きげんは非常によろしい。悦んでいる様子である、の意。）

Ⅲ－a ⑤乗舟還、宇治水極少、依之則忠宅許乗之、（寛弘元 10/22 上一一二ペ）

（舟に乗って還るのだが、宇治川の水が非常に少ないので、則忠の宅の許に舟を乗入れた、という意。）

〔資料一〕〔資料二〕から明らかなように、「極(メテ)」は、Ⅰ(＝被修飾語が、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示している場合)が九〇・九％(40例)までを占めている。即ち、Ⅱ(＝被修飾語が、称賛すべき事柄・望ましい事柄を示している場合)の二・三％(1例)、Ⅲ(＝被修飾語が、望ましいとか望ましくないとかの判断には無関係の場合)の六・八％(3例)、に比べて、Ⅰに著しく片寄っている。そしてこの事は、「頗(ル)」以下の副詞の場合と比較してみても明らかである。

なお、〔資料二〕からわかるように、「尤(モ)」はⅡが八四・〇％(21例)で、Ⅰが一六・〇％(4例)であって、Ⅱに著しく片寄っている。即ち、「極(メテ)」と「尤(モ)」は、その用法において対照的であると言える。

ところで、本文献の「極(メテ)」のこのような用法は、他の記録語の文献においても言えるのかどうかを調べたところ、本文献と同時代の小右記・権記にもほぼ同様な傾向が見られる。

二、小右記・権記の「極(メテ)」

小右記・権記について、本文献と同様に、被修飾語に着目して整理してみると、〔資料三〕〔資料四〕〔資料五〕〔資料六〕になる。

〔資料三〕〔資料四〕から、小右記の「極(メテ)」の被修飾語は、Ⅰ(＝被修飾語が、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示している場合)が八六・二％(175例)を占めていることがわかる。Ⅱは、合せて一三・八％(28例)に過ぎない。

〔資料五〕〔資料六〕から、権記においても、「極(メテ)」の被修飾語はⅠが殆どで、九五・五％(21例)を占めていることがわかる。

なお、小右記・権記の具体例は省略する。

三、中国側の文献における「極(メテ)」

前節一・二で見たように、記録語の三文献――御堂関白記・小右記・権記――において、「極(メテ)」の被修飾語の意味はⅠ、即ち、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示している場合、に片寄っていた。このことは、どのように解釈せられるであろうか。本文献等における「極(メテ)」のこのような用法は、我国特有のそれであるのかどうか。それを確かめるために、中国側の文献を見ることにする。

漢籍としては、史記・世説新語・文選の三点を、仏書としては、金光明最勝王経・大慈恩寺三蔵法師伝の二点を、それぞれ取上げる。

漢籍として右の三点を選んだのは、次の理由による。四書五経には副詞「極(メテ)」の用例が見出せず、「イタル・キハム・キハマル・ヤム」等に訓読される動詞の例と、「極・三極・有極・民極」等の漢語に読まれる例とに限られていること。一方、史記・世説新語・文選には、少いながらも副詞の例が見られること。又、史記や文選は、本文献の中にその書名が見えており、遣長にも愛読せられたであろうこと。

仏書として右の二点を選んだのは、次の理由による。他の仏書に比べて、「極(メテ)」という副詞の例が比較的多く用いられていること。両者共に訓点資料であるから、それぞれの時代の、即ち、金

光明最勝王経古点は平安時代初期の、大慈恩寺三蔵法師伝古点は院政時代の、日本人の訓読による理解の仕方が伺えること。

先ず漢籍について。史記では、〔資料七〕からⅠ（＝被修飾語の意味が、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示す場合）が四一・七％（5例）である。世説新語では〔資料八〕から、Ⅰが二二・二％（2例）であり、文選に至っては〔資料九〕から、Ⅰが皆無である。

このように、漢籍においては、本文献のような著しい片寄りは見られない。

次は仏書について。金光明最勝王経では、〔資料十〕からⅠが二八・六％（2例）である。大慈恩寺三蔵法師伝では、〔資料十一〕から、Ⅰが一五・四％（4例）である。仏書においても、明らかに、本文献のような片寄りは見られない。

四、今昔物語集の「極（メテ）」

今昔物語集においても、〔資料十二〕〔資料十三〕から明らかなように、Ⅰが五二・九％（255例）であって、本文献のような著しい片寄りは見られない。

五、結論

本文献の「極（メテ）」の被修飾語の意味は、Ⅰ、即ち、非難すべき事柄・望ましくない事柄を示す場合、に著しく片寄っている。この事は、中国側の文献や今昔物語集と比較してみても、明らかである。

又、本文献の「極（メテ）」のこのような用法は、我国特有のそれである、とまでは言えないにしても、少くとも、ほぼ同時期の三つの記録語文献――御堂関白記・小右記・権記――に共通するそれである、と言える。

なお、このような片寄りの理由と意味付けとについては、今のところ明らかにし得ず、後日に考えることにしたい。（昭和49年11月7日　稿了）

――中国短期大学講師――

付記。本稿は、第19回国語学会中国四国支部大会（於山口女子短期大学）において口頭発表したものを、まとめたものである。その際、土井忠生先生・小林芳規先生を初め、諸氏から御教示を賜った事に対し、謝意を表するものである。

〔資料一〕御堂関白記の程度副詞の被修飾語とその用例数

注1、和語は平仮名で、字音語は片仮名で、それぞれ読み方を示す。この事は以下の全ての文献に共通する。

2、底本は、大日本古記録所収の御堂関白記、上中下三冊による。

I－a

被修飾語	奇	重	難	奇怪	軽々	荒涼	過差	下品	異様	殊様	難堪	無力	無便宜	無便	不覚	不当
読み方／副詞	あやし	おもし	かたし	キウイ	キウ	クウリヤウ	クウサ	ケホム	ことヤウ	ことヤウ	たへかたし	ちからなし	ヒキなし	ヒンなし	フカク	フタウ
極	8	6	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	16	1	0
頗	1	2	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	3	0	1
甚	7	4	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	1	2	1	2
太	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
尤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

I－b

被修飾語	不合	相違	奇	有疑	有恐	有悩氣	打違	不堪
読み方／副詞	あはず	あひにかふ	あやしふ	うたがひあり	おそれあり	なやましケあり	うつ	たかふ	たへず
極	0	0	0	0	0	0	0	0	1
頗	0	1	1	0	0	1	1	0	0
甚	0	0	0	0	0	0	0	0	0
太	0	0	0	0	0	0	0	0	0
尤	1	0	0	1	1	0	0	1	0

	不便	見苦	狼藉	至愚
	フヒン	みくるし	ラウセキ	シク
総計	2	1	1	0
39	0	0	0	0
9	0	0	2	0
26	0	0	0	0
1	1	0	0	0
0	0	0	0	0

II－a

被修飾語	糸惜	奇怪	希有	理也	盛	可然	上品	神妙	道理	美也	非凡	深
読み方／副詞	いとほし	キウイ	ケウ	ことはり	さかん	しかるべし	ヤウホム	シンヘウ	タウリ	ヒなり	ホにあらず	ふかし
極	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
頗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
甚	1	1	3	0	0	0	0	1	0	2	0	1
太	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
尤	0	0	0	0	1	3	1	0	1	2	0	2

	悩
	なやむ
総計	
1	0
7	2
0	0
0	0
4	0

〔資料四〕小古記の程度副詞の被修飾語の用例数の一覧表

保留例	総計	Ⅲ n	Ⅲ v	Ⅲ a	Ⅱ n	Ⅱ v	Ⅱ a	Ⅰ n	Ⅰ v	Ⅰ a	副詞
6	203	0	1	15	0	5	7	0	6	169	極(メテ)
	100.0%	16=7.9%			12=5.9%			175=86.2%			
0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	12	至(リテ)
	100.0%	0=0%			0=0%			12=100.0%			
1	291	1	25	13	0	32	79	1	58	82	頗(ル)
	100.0%	39=13.4%			111=38.1%			141=48.5%			
0	385	0	2	61	0	17	34	0	35	236	太(タ)
	100.0%	63=16.4%			51=13.2%			271=70.4%			
0	126	0	0	34	0	3	14	0	10	65	甚(タ)
	100.0%	34=27.0%			17=13.5%			75=59.5%			
1	223	0	11	26	0	27	104	0	44	11	尤(モ)
	100.0%	37=16.6%			131=58.7%			55=24.7%			
0	56	12	1	7	1	7	20	0	2	6	寡(モ)
	100.0%	20=35.7%			28=50.0%			8=14.3%			

〔保留例 6例〕

① 極多奇事

Ⅱ-a

総計	佳良豊贍	深	貴	靜
7	よし 2	よし 1	ホウセン 1	ふかし 1	たふとし 1	しつか 1

Ⅰ-v

総計	病	恐申	嬾	謬
6	や 1	む 2	おそれます 1	おこたる 2	あやまる

総計	難堪	難耐	難被行	潟澁	狼藉	不宜	無由
169	たへかたし 1	にへかたし 1	おこなはれかたし 1	を 1	ラウセキ 3	よからず 2	よしなし 1

Ⅲ-v

総計	感思
1	カムジおもふ 1

Ⅲ-a

総計	低弱	苦	短	多〻	高	少	希代	多	淺	明
15	キヤウジヤク 1	わかし 1	みじかし 1	タ 2	たかし 1	すくなし 2	ケタイ 1	おほし 4	あさし 1	あかし 1

Ⅱ-v

総計	悅思	和悅	優	有驗
5	よろこひおもふ 1	やはらきよろこぶ 1	すくる 2	しるしあり 1

② 極多耻辱
③ 極爲省略
④ 極寡少
⑤ 極嚴寒
⑥ 極苦熱

Ⅲ－a

総計	便太	烈	冽	年長	遠	長大	遅く	近	少	清明	盛	多	大 遅	被修飾語 / 副詞	読み方
	すなはち	はなはだし	はげし	はげし	ネンチャウ	とほし	チチ	ちかし	すくなし	セイメイ	せかん	おほし	おほきく おそし		
3	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0 0 0	極	
3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0 0 1	頗	
35	0	1	1	2	0	1	0	0	5	1	1	6	9 8 0	甚	
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 4 0	太	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 0 0	尤	

Ⅱ－n

総計	雄く をを	宜 よろし	能 よし	吉 よし
1	0	1	0	0
20	1	18	0	0
13	0	0	4	0
0	0	0	0	0
16	0	2	1	2

徳物（トクのもの）「頗」に1例。

Ⅰ－a

痛	奇く	奇
いたし	キキ	あやし
1	1	12

愚	重	恐
おろか	おもし	おそろし
4	12	1

〔資料二〕〔資料一〕を百分率で示した一覧表

総計	Ⅲ n	Ⅲ v	Ⅲ a	Ⅱ n	Ⅱ v	Ⅱ a	Ⅰ n	Ⅰ v	Ⅰ a	副詞
44	0	0	3	0	0	1	0	1	39	極（メテ）
100.0%	3＝6.8%			1＝2.3%			40＝90.9%			
48	0	5	3	1	3	20	0	7	9	頗（ル）
100.0%	8＝16.7%			24＝50.0%			16＝33.3%			
75	0	0	35	0	1	13	0	0	26	甚（ダ）
100.0%	35＝46.7%			14＝18.7%			26＝34.7%			
5	0	0	4	0	0	0	0	0	1	太（ダ）
100.0%	4＝80.0%			0＝0%			1＝20.0%			
25	0	0	0	0	5	16	0	4	0	尤（モ）
100.0%	0＝0%			21＝84.0%			4＝16.0%			

〔資料三〕小右記の「極（メテ）」の被修飾語とその用例数

注1. 大日本古記録所収の小右記七冊による。

難	腹痛	悲	辛	奇怪	輕く	荒涼	嬌銜	無心	異様	冷	猛	無力	無所據	悩	非常	無便宜	無便	深	不當	不便	不法	凡	見苦	無用	下吾
かたし	いたし	かなし	からし	キクワイ	キャウく	ラウリャウ	ケウショク	ミこころなし	ことヤウ	すさまし	たけし	ちからなし	シキヨなし	なやまし	ヒシヤウ	ヒンギなし	ヒンなし	ふかし	フタウ	フヒン	フホフ	ホン	ヤくるし	ヨウなし	よからず
2	1	1	3	19	2	1	1	2	3	1	4	1	1	14	1	1	15	2	4	40	1	1	1	1	2

〔資料五〕権記の「極(メテ)」の被修飾語とその用例数

注1. 史料大成所収の権記二冊による。

	I-a									
	重く						軽く	難き	非常	無便宜	無便	無愛	不便	無用意
総計	おもし	キヤウく	たかたし	ヒシヤウ	ヒさなし	ヒンなし	フアイ	フヒン	ヨウイなし
20	2	1	1	2	2	3	1	7	1

	I-n	
	恥辱	
総計	ナヨク	
1	1	

	II-a	
	神妙	
総計	シンヘウ	
1	1	

〔資料六〕権記の程度副詞の被修飾語の用例数の一覧表

副詞	I n	I v	I a	II n	II v	II a	III n	III v	III a	総計
極(メテ)	1	0	20	0	0	1	0	0	0	22
			21=95.5%			1=4.5%			0=0%	100.0%
頗(ル)	1	4	2	0	11	7	0	4	0	29
			7=24.1%			18=62.1%			4=13.8%	100.0%
甚(タ)	0	13	63	0	1	15	0	4	0	96
			76=79.1%			16=16.7%			4=4.2%	100.0%
尤(モ)	0	7	2	0	8	1	0	11	2	31
			9=29.0%			9=29.0%			13=42.0%	100.0%
寂(モ)	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
			0=0%			1=50.0%			1=50.0%	100.0%

〔資料七〕史記の「極(メテ)」の被修飾語の一覧表

I-a	
愚カ	
難シ	おろか
かたし	
1	1

〔資料八〕世説新語の「極(メテ)」の被修飾語の一覧表

	I-v	II-a	II-v			III-a	
	罵	善	進	歎	惋	明	遲
総計	あなとる	よし	すすむ	タンズ	ワンカク	あかし	おそし
9	2	2	3			2	
100.0%	22.2%	22.2%	5=55.6%			22.2%	

注. 和刻本正史 史記（汲古書院）二冊による。

	II-a	III-a		III-v	
	哀	衆	簡	知	忘
総計	傷ハシ	シ	易	ルル	ル
	かなし	おほし	カンイ	しる	わする
1	2	1	1	3	1
12	5	2		4	
100.0%	41.7%	8.3%	6=50.0%		

注、四部叢刊本による。

〔資料九〕文選の「極(メテ)」の被修飾語

Ⅲ-a 高深(カウシン) 1例

注、索引本文選(中文出版社)による。

〔資料十〕金光明最勝王経の「極(メテ)」の被修飾語の一覧表

	Ⅲ-a	Ⅱ-a				Ⅰ-a	
	柔耎	圓滿	甚深	清淨	殊妙	難(シ)	重(シ)
	ニヤネン	ユンマン	シンシン	シヤウ(ク)	シユメウ	かたし	おもし
7	1	1	1	1	1	1	1
100.0%	1=14.3%	4=57.1%				2=28.6%	

注、西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究による。

〔資料十一〕大慈恩寺三蔵法師伝の「極(メテ)」の被修飾語の一覧表

Ⅲ-a											Ⅱ-ひ		Ⅱ-a			Ⅰ-ひ		Ⅰ-a	
明(ラカ)	歓(ナリ)	者(ル)シ	多(ク)シ	固シ	異ナ(リ)	般(ナリ)	清(ク)	諸(ル)(ル)	藪(ク)	短(シ)	牢固	加フ	主ス	豊穣	殊妙	厳麗	怖畏(ク)	慙(ツ)	荒梗(ク)	難シ
あきらか	あらはなり	いとるし	おほし	かたし	ことなり	さかりなり	セイキフ	そらなり	ひろし	ヤーかし	ラウコ	くわふ	なす	ホウシヤウ	シユメウ	コンレイ	はつ	フイす	クウカウ	かたし
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
16												2		3			2		2	
17=65.4%												5=19.2%					4=15.4%			

Ⅲ-ひ	
喩(ス)	崇(シ)
こゆ	たかし
1	1
1	

注、興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究による。

〔資料十二〕今昔物語集の「極メテ」の被修飾語の用例数

Ⅰ-a

愛无シ	奇異シ	悪シ	怪シ	不審シ	殘シ	怖シ	恐シ	怖気ナリ	重シ	愚ナリ	難シ	悲シ	力ハ、ユシ	奇異ノキイ	機氣ナリ	穢シ	口惜シ	愚疑ニク	苦シ	苦気ナリ	氣悪シ	氣恐シ	心苦シ	心モトナシ	心幼氣ナリ	異様也	騒カシ	慈悲无シ	猛シ	便无シ	徒然也
アイなし	あさまし	あし	あやし	いふかし	いやし	おそろし	おそろし	おそろしケ	おぼし	おろか	かたし	かなし	かはゆし	キイ	きたなケ	きたなし	くちをし	クケ	くるし	くるしケ	けあし	けおそろし	こころうし	こころもとなし	こころなケ	さまかし	たけし	たよりなし	つれく		
1	2	1	3	1	15	10	6	3	16	1	6	17	12	3	1	2	3	2	3	1	1	2	1	1	1	6	1	1	1	1	1

語	読み	数
拙シ	つたなし	1
情ケ无シ	なさけなし	2
憎シ	にくし	6
嫉シ	ねたし	1
ネチケシ	ねしけし	1
残リ无シ	のこりなし	1
墓无シ	はかなし	3
半无シ	はしたなし	1
恥カシ	はつかし	3
腹悪シ	はらあし	1
非道	ヒタウ	2
貧窮テシ	ヒンクウ	3
便无シ	ヒンなし	1
貧ナリ	ヒン	1
无愛也	フアイ	1
不合ナリ	フカウ	1
深シ	ふかし	1
不便ナリ	フヒン	5
本意无氣也	ホイなケ	1
貧シ	まつし	15
見苦シ	みくるし	4
物痛シ	ものいたし	1
无益シ	ヤクなし	14
恣シ	やさし	1
不安ズ	やすからず	·5
不宜ズ	よからず	1

語	読み	数
狼藉セ	ラウセキ	1
煩シ	わつらはし	1
侘シ	わひし	1
可咲	をかし	1
惜シ	をし	1
難去シ	さりかたし	1
難知シ	しりかたし	1
難堪シ	たへかたし	1
難遁シ	のかれかたし	1
難忘シ	わすれかたし	1
恐シ氣セ	おそろしけ	4
総計		223

I－ひ

語	読み	数
怪ヒ恐ル	あやしひおそる	1
怪シフ	あやしふ	1
荒ル	ある	1
恐レ有リ	おそれあり	1
罪有リ	つみあり	1
訴フ	うつたふ	1
恐ル	おそる	2
恐チ怖ル	おちおそる	1
恐チ迷フ	おちまよふ	1
恐ツ	おつ	2
極ス	コウす	1
不心得ズ	こころえず	3

語	読み	数
騒ク	さわく	1
萎ム	しほむ	1
制ス	セイす	1
謗リ申ス	そしりまうす	1
不堪ズ	たへず	1
歎ク	なけく	1
苦ル	にかる	1
徴ル	はたる	1
恥チ悲フ	はちかなしふ	1
僻ム	ひかむ	2
不足セ	フソク	2
耄ル	ほる	1
瘦セ枯ル	やせかる	1
総計		31

II－a

語	読み	数
哀レナリ	あはれ	8
隣レ也	あはれ	1
難有シ	ありかたし	9
嚴シ	いつくし	4
糸惜シ	いとほし	9
美シ	うるはし	1

I－n

語	読み	数
恥也	はち	1
総計		1

語	読み	数
喜シ	うれし	11
喜氣ナリ	うれしけ	1
面白シ	おもしろし	1
謙シ	おもしろし	1
賢シ	かしこし	6
忝ナシ	かたしけなし	4
悲シ	かなし	1
浄シ	きよし	1
清ラナリ	きよら	1
氣高シ	けたかし	2
心強シ	こころつよし	1
戀シ	こひし	3
戀シ氣	こひしけ	1
聡敏ナリ	ソウヒン	1
大切	タイセツ	1
貴氣ナリ	たふとけ	1
貴シ	たふとし	35
道理ナリ	タウリ	1
猛シ	たけし	10
武シ	たけし	2
緩ミ无シ	たゆみなし	1
端正ナリ	タンシヤウ	1
便々シ	つきつきし	1
強シ	つよし	4
手闘ナリ	[illegible]	1
美ナリ	ヒ	1

〔資料十三〕今昔物語集の「極メテ」の被修飾語の用例数の一覧表

	美麗シ	深シ	風流也	欲シ	睦シ	物上手ミテ	止事無シ	喜ハシ	善シ
総計	ヒレイ	ふかし	フリウ	ほし	むつまし	もののシウス	やむことなし	よろこばし	よし
141	1	2	5	1	2	1	1	1	1

Ⅱ－ｖ

	受敬付ク	遮有リ	情有リ	文花有リ	達ル	敬フ	思フ	聞ク	禁ズ	潔斉ス	好ム	喜フ	聞マ欲シ	見マ欲シ
総計	アイキヤウク	タウシムあり	なさけあり	コンカあり	いたる	うやまふ	おもふ	きく	キンず	ケッサイす	このむ	よろこぶ	きかまほし	みまほし
4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	4	1

Ⅱ－ｎ

	功徳
総計	クトク
1	1

総計	
21	

Ⅲ－ａ

	明シ	明ラカ也	熱シ	暑シ	甘シ	青シ	大ナリ	多シ	重シ	馥シ	固シ	晁シ	口早シ	暗シ	黒シ	嶮シ	木暗シ	寒シ	静ナリ
総計	あかし	あきらか	あつし	あつー	あまし	あをし	おほきー	おほし	おもー	かうばし	かたし	くさし	くちはやし	くらし	くろし	けはし	こくらし	さむし	しつか
5	1	3	1	1	1	1	4	11	4	1	2	2	1	1	1	1	2	1	1

Ⅲ－ｖ

	遊フ	値フ	有リ	老ユ	老耄ス	酔フ
総計	あそぶ	あふ	あり	おゆ	ウモウす	ゑふ
6	1	1	1	1	1	1

	少シ	狭シ	高シ	小シ	難量シ	疾シ	久シ	細シ	希也	短シ
総計	すくなし	せばし	にがし	ちひさし	はかりがたし	はやし	ひさし	ほそし	まれ	みじかし
58	1	2	4	1	1	1	1	1	1	1

総計	Ⅲ			Ⅱ			Ⅰ		
	n	v	a	n	v	a	n	v	a
482	0	6	58	1	21	141	1	31	223
100.0%	64=13.3%			163=33.8%			255=52.9%		

注。底本は、日本古典文学大系の今昔物語集、全五冊による。